
初夏の迷走

高山智春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初夏の迷走

【Zマーク】

Z6089C

【作者名】

高山智春

【あらすじ】

ひと夏の思い出つてのは、人それぞれだ。俺にとってのこの夏は
……終わることのない、冒険物語である。

序章（前書き）

気軽に読んでもらえたらうれしいです。
と同時にあまり期待しないほうがいいかも……。

1 記憶を一通り探つてみた。脳内検索といつやつだ。

その作業を終えた俺は、薄暗くなつた室内をぼんやりと見下げる。窓は開けていない。おかげで夏の暑さが容赦なく俺の身を焦がす。くしゃくしゃになつてしまつたベッドのシーツを直すことも無く、俺は身を起こした。

途端に熱を感じて窓を開けた。

カーテンが揺れ、冷たい空気が雪崩れ込んでくる。

初夏の迷走から一週間経つた今でも、あの時の気持ちが忘れられない。

今すぐにでも、走り出したい。

そんな気持ちに駆られた。

夏休みを目前に控えたある日、俺達は迷走した。

迷走とは言つても、そんなに大それた事ではない。

ただ、俺達にしか出来ない、最高の遊びだったと言うことは確かだ。

言い方を変えれば、思い出作り。

そう、中学校生活最後の、夏。

はじめに言い出したのはクラスメイトであり友人である千早だった。

その前からもクラスでお別れ会みたいなことをやろうとか言つていたのだが、それでは普通すぎると千早が俺に直談判を仕掛けてきた結果、『いつものグループ』内で何かしようといつ結論に至つたのだ。いや、至つてしまつたと言つべきか。

俺にとつとしてみれば正直なところ勘弁願いたい事だった。その理由は、千早の性格にあるのだが・・・まあ、俺が言つたところで

何も変わりはしないだろう。

・・・明日、か。丁度いい、もう少し余韻に浸つていよう。どうせ、やることはないのだし。

2

「陽一、こうなつたら4人で何か一発やるよー。」
「出来れば遠慮してもらいたい」

即答。これが俺と千早の会話におけるリズムである。

放課後の教室、『いつものグループ』の4人で集まつて、夏の迷走について話し合つてゐる。実際、千早が強引に皆を集めたのだが。『いつものグループ』とは、中学1年から運良く同じクラスになり続け、そのため仲良し4人組みみたいな扱いを受けている4人のことである。俺と千早、あと直哉つて言う体力バカと亜衣つていう男子からの人気が高い、いわば『アイドル的存在』とでも言おうか、そんな2人である。

「はーい、質問いいですかー？」

氣だるそうに口を開き、それでも変わらず窓の方をみている直哉に対し、千早は「何」と短く応えた。それに合わせて直哉が質問の内容を口にする。

それは決定打となり、その日の話し合いは中止となつた。

翌日もその翌日も、夏休みが終わつたすぐ後にある体育祭の会議で、千早は放課後の暇が無くなつていた。そしてうやむやになつていた『何か一発やる』計画は置き去りにされて、ただ俺は日々を過ごすのみだった。

休み時間まで『いつものグループ』でいるワケではないので、尚更だ。

そうやって平和を保つていたとき、耳に入ってきたのだ。

「ねえ、夏祭り、誰と行く？」

女子生徒達が話し合つてゐる様だ。男子生徒も同様、休み時間等を利用して夏祭りの計画を立てている。毎年恒例の花火祭り。

俺は誰と行こうか。

「とは言つても、毎年恒例なのはメンバーにおいても同じ事で……」

どうやら寝ぼけていたようだ。

その証拠に、気がついたら授業は終わっていて、
「参ったな」

社会科のノートに意味不明の数列が並んでいたのみであった。

かくして夏祭りである。

同じ学校の生徒がちらほら見受けられる。

結局、『いつものグループ』で夏祭りを楽しむことになった俺たちは、出店を順に見て周っているところだ。

「たこ焼きだよ！」

「絶対イカ焼きだ」

そしてたった今直哉と千早の口論が始まったところである。

「なあ一人とも、さつきから食つてばかりじゃないのか？」

かれこれ10品目だろうか。

「去年と何にも変わつて無いよね」

優しい笑みを浮かべながら巫衣が呟く。

今回の夏祭りにおいてもこの一人の大食いに付き合わされる羽田になるだろう。

そんな事を考えて、うちに口は落ち、空にはたくさんの星が浮かんでいる。

もうすぐ花火が打ち上げられる。毎年恒例の花火大会だ。

序章（後書き）

殴り書きで没ストーリーだったのですが、もし続기가読みたいという人がいるのなら、その時は力を入れて書かせて頂きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6089c/>

初夏の迷走

2011年1月16日06時24分発行